

メタ倫理学と批判的合理主義

立 花 希 一

The Place of Critical Rationalism in Meta-Ethics

Kiichi TACHIBANA

Abstract

This paper deals with some problems of meta-ethics in modern times. There are three views in meta-ethics: naturalism ; intuitivism ; noncognitivism. It is taken for granted that each view is incompatible with the others, and in order to be consistent, we cannot but accept one of them. Against this common opinion, we claim that the three views have two prerequisites in common and that once we replace them with other ideas which are characteristics of Popper's critical rationalism, we can consistently propose the *fourth* view in meta-ethics.

I. 前書き

今世紀最大の哲学者の一人と目されるポパー (K. R. Popper) が、1994年9月17日に亡くなった。かれはとうとう長く続けてきた自分の哲学をすることができなくなってしまった。この出来事は私にとって辛く、悲しいことであった。しかし、嘆き悲しんでばかりいるわけにはいかない。かれの仕事を受け継ぎ、発展させる役目がわれわれに回ってきたのである。これは困難な仕事であるが、二十一世紀に向けてどうしてもやらなければならない仕事であるように私には思われる。その手始めとして、ポパーの倫理思想の意義を考察することにしたいと思う。その理由は二つある。一つは、ポパーの思想の根底には倫理があるといわれながら、その解明があまりなされていないということである¹⁾。もう一つは、現代倫理学の諸潮流の中でも、ポパーの倫理思想が取り上げられることが少なく、その位置づけが不明瞭であることである²⁾。二十世紀に終わりを告げようとしている現在、ポパーの倫理思想を見極めることによって、二十一世紀に残し、発展させるべきポパーの遺産があるかどうかを判断し、もしあるとしたら、それが何であるのかを考察することにしたい³⁾。

II. メタ倫理学の3つの類型

二十世紀はメタ倫理学の時代と呼ばれてきた。前世紀までの倫理学においては明確に区別されず、混同されてきた規範倫理学とメタ倫理学とがようやく区別されるようになり、しかも後者の考察が盛んに行われるようになったのが今世紀だったからである。メタ倫理学と規範倫理学とが区別されるようになった経緯には、前世紀末から今世紀にかけて、論理学が著しく発展したことがある。その中でも特に、A. タルスキー (A. Tarski, 1902-1983) が確立した意味論 (semantics) 上の業績に拠るところが大きいので、それを検討しながら、メタ倫理学と規範倫理学の区別を明確にすることにしよう⁴⁾。

(1) 対象言語とメタ言語

タルスキーが対象言語とメタ言語を区別した背景には、古代ギリシャ以来論じられてきた、真理にまつわる難問⁶⁾があった。その1つは「嘘つきのパラドックス」として知られているものである。ある人が、『私は嘘をついている』といったとしよう。『私は嘘をついている』が真であるならば、かれは『私は嘘をついている』という嘘をついている」ことになるので、『私は嘘をついている』というのは偽だということになり、他方、『私は嘘をついている』というのが偽であるならば、かれは『私は嘘をついている』という本当のことをいっている」ので、『私は嘘をついている』というのは真だということになってしまう。すなわち、その人の主張が真であると仮定すると、その主張は偽であるということになり、反対にその主張が偽であると仮定すると、真であるということになる。こうして、正命題とその否定命題の両方ともが自己矛盾に陥ることになる。これは自己言及 (self-reference) のパラドックスの一種であるが、対象言語とメタ言語を区別することによって、このパラドックスを巧妙に解決したのが、タルスキーであった。

先ず、簡単な例によって、対象言語とメタ言語の区別を明らかにしよう。「ソクラテスは哲学者である」という文と「ソクラテスは5文字である」という文を考えてみよう。前者については、歴史上の人物のソクラテスのことについて語っている文であるとみなせば、真であることが容易にわかる。しかし、後者はどうであろうか。もし後者の文が、前者と同じ歴史上の人物について語っているとみなすと、人間が5つの文字でできているわけではないので、後者の文は偽であるということになるだろう。

このような誤解は次のように解釈すると容易に解くことができる。すなわち、「ソクラテスは5文字である」という文は歴史上の人物としてのソクラテスについて語っているのではなく、例えば、前者の文で用いられている「ソクラテス」というカタカナの文字数について語っているのだと解釈するのである。始めの誤解のように、この二つの文が、同じ対象について語っていると解釈すれば、前者は真、後者は偽ということになってしまうが⁶⁾、前者はプラトンの師であった歴史上の人物について語っているのに対して、後者はカタカナで書かれたソクラテスという文字について語っていると解釈すれば、どちらも真であるという具合に理解できる。すなわち、前者は、歴史上の人物という言語外的対象について語っている対象言語に属する文であり、後者は、その対象言語について語っているメタ言語に属する文である。この言語のレベルの相違を明確に区別しないで混同すると、問題が生じることになる。

先のパラドックスについていえば、『私は嘘をついている』という文は、ある決まった内容（例えば、今、ポケットにはいっている財布の色は黒であるのに、茶色であると嘘をいうことなど）について語っている対象文であるのに対して、『私は嘘をついている』と嘘をついている」の文に登場する後半部分の「嘘をついている」という文は、その対象文について語っているメタ文である。したがって、『私は嘘をついている』という文と、『私は嘘をついている』と嘘をついている」という文は異なる対象について語っている文として理解しなければならず、もともとの発言に登場する「嘘をついている」という言葉がどのレベルの言語に属するのかを決めておかないと内容を理解することはできないのである。もしももとの発言に登場する「嘘をついている」という言葉が財布に関するものであるとするならば、「嘘をついている」という言葉をそれとは対象の異なる、『私は嘘をついている』という発言について用いることはできないことになる。したがって、『私は嘘をついている』という嘘をついている」と解釈することは言語のレベルを混同することになるので、それは許されず、『私は嘘をついている』というのは偽だという結論を導くことはできなくなる。他方、『私は嘘をついている』という本当のことをいっている」と解釈することも許されず、『私は嘘をついている』というのは真だという結論を導くこともできないことになる⁷⁾。

さて、こうした言語のレベルを区別するために考案されたのが、引用符の使用である。ソクラテスの例を用いれば、

- 0 (言語外的対象) : 人物としてのソクラテス
- 1 (対象言語) : ソクラテスは哲学者である。
- 2 (メタ言語) : 「ソクラテス」は5文字である。

このようにメタ言語に属する文に登場するソクラテスには「ソクラテス」と引用符をつけることによって、対象言語に属する文に登場するソクラテスとは、その対象が異なることを明示するのである。後に出てくるように、引用符が文全体にかかる場合もあり、実はその方が通常の形である⁸⁾。

タルスキーはさらに、真理の意味論的定義を行ったのだが、ここでは立ち入らず、ただ対象言語とメタ言語を慎重に区別しないと、困難やパラドックスに巻き込まれてしまう場合があるということを確認しておくことにしたい⁹⁾。

(2) 規範倫理学とメタ倫理学

以上の対象言語とメタ言語の区別を倫理学の分野に応用したのが、規範倫理学とメタ倫理学の区別である。

- 0 (言語外的対象) : 現実世界における人間の発話、行為など。
- 1 (規範倫理学) : 人は嘘をつくべきではないとか、脳死によって人の個体死とすべきではないとか、殺人は悪である、など。
- 2 (メタ倫理学) : 「人は嘘をつくべきではない」という当為は、実際に嘘をつく人間がいるという事実によって無効にされるようなことはない、など。

規範倫理学は、この現実世界において実際に行われる人間の具体的な発話、行為について、それらを抑制したり、推奨したりするために、命令や禁止などの当為を述べるものである。メタ倫理学は、規範倫理学で用いられる命令や禁止などの当為を分析したり、それと事実との関係を考察したり、善、悪の定義を考察したり、規範を導出する議論を批判的に吟味・検討したりなどを行うものである。したがって、規範倫理学とメタ倫理学とはその対象を異にするのであり、後者は、規範倫理学について考察するものであり、その考察の中で規範と現実世界の事実との関係などについて考察することはあるかもしれないが、現実世界における人間の言動などについて直接発言するものではない。

それでは、このようなメタ倫理学はどのような意義があるのだろうか。規範倫理学とメタ倫理学とを区別しないとパラドックスに巻き込まれるなどということはないけれども、規範倫理学においては、どうしても自分自身の一定の価値や規範を述べざるを得ず、その結果、ともすれば自分の奉じる規範や価値に固執し、それらとは相容れない規範や価値に対して攻撃的になったりしがちである。それに対して、メタ倫理学においては、このような規範倫理学とは明確に区別することによって、さまざまな規範や価値の相互の関係や、規範や価値と事実との関係などについて、冷静な立場から価値中立的に、より客観的に議論することが可能になるということが挙げられるだろう¹⁰⁾。以下の考察は、メタ倫理学上の問題に関するものである。

(3) メタ倫理学の3つの類型

堀田彰氏は、著書『倫理学』の中で、今世紀のメタ倫理学上の立場を3つに類型化し、それを三段論法の形で完結に述べている。これが私たちの議論の出発点である¹¹⁾。

1) 自然主義 (naturalism)¹²⁾

P: 知識の源泉は経験と理性だけである

Q: われわれは倫理的価値に関する知識をもっている

R: 経験と理性がわれわれに倫理的価値に関する知識を与える

2) 直覚主義 (intuitionism)

Q: われわれは倫理的価値に関する知識をもっている

⊢R: 経験と理性はわれわれに倫理的価値に関する知識を与えない¹³⁾

⊢P: 知識の源泉は経験と理性だけではない (直覚がある)

3) 非認識主義 (nonscognitivism)¹⁴⁾

P: 知識の源泉は経験と理性だけである

⊢R: 経験と理性はわれわれに倫理的価値に関する知識を与えない

⊢Q: われわれは倫理的価値に関する知識をもっていない

自然主義と直覚主義はQを共有している点で非認識主義と対立し、直覚主義と非認識主義は⊢Rを共有している点で自然主義と対立し、非認識主義と自然主義はPを共有している点で直覚主義に対立するという具合になっており、さらに、自然主義が成立すれば、他の二つの立場は成立せず、直覚主義が成立すれば、他の二つは成立せず、以下、同様という具合に、この議論は三竊みになっている。したがって、整合的であろうとするならば、この3つの説のうちどれかに組しなければならないように思われてきた。果たしてそうであろうか。第4の説はありえないのだろうか。これがわれわれの取り組むべき課題である。

Ⅲ. 3つの類型に共通する諸前提

今、3つの説のうちのどれかに組しなければならないと考えられてきたと述べたが、それはこれら3つの説が共有している前提を認めればの話である。その前提を解明するのに、ポパーの批判的合理主義の考え方が役に立つ。それを手がかりにしながら、前提の解明に努めることにしよう。共通する前提として、次の2つに関するものが考えられる。すなわち、(1) 知識に関する前提: K-Kテーゼ、(2) 根拠、源泉に関する前提: 正当化主義、である。この二つの前提は相互に関係するものではあるが、ここでは一応、分離して、順次、考察することにしよう。

(1) 知識に関する前提: K-Kテーゼ

伝統的な認識論によれば、知識が成立するためには二つの条件が必要であると考えられてきたし、現在でもそう考えている人も多い。この二つの条件の一つは、確実に真であることと、もう一つは、それに正当な根拠があることである。われわれは、単に真なる言明を知っているだけでは、それは知識とはいえず、それが確実に真である根拠についても知っていなければならないというのである。この二重の意味で知っていることが、知識の成立条件であることから、通常、K-Kテーゼと呼ばれている (K-Kとは、二つの Know の頭文字を並べたものである)。先の3つの類型でも、この

K-Kテーゼが前提されている。正当な根拠として、理性と経験という二つの源泉が挙げられているからである¹⁵⁾。近代認識論においては、デカルトが、理性を権威ある根拠にし、ベーコンは経験を権威ある根拠にして認識論を組み立てたことは周知の事実である。

ところが、科学的知識に限っても、科学理論は理性によっても、また経験によっても正当化されえず、したがって、科学的知識は従来のK-Kテーゼの条件を満足しておらず、もし従来の「知識」の概念を保持して、K-Kテーゼの条件を満足するものだけが知識と呼ばれるに値すると考えるならば、科学的知識は「知識」とは呼べなくなるということを明らかにしたのが、ポパーであった。ここでわれわれは二つの選択肢からの選択に直面する。すなわち、従来の「知識」の概念を保持するか、あるいは、どんな根拠によっても正当化されないとしても、科学的知識を「知識」として認めるかという選択である。ポパーは、後者を選択し、科学的知識を「推測的知識」と名づけるのである¹⁶⁾。科学的知識ですら何らかの根拠によって正当化される確実に真なる知識ではないとするならば、仮に倫理的価値に関する知識が何らかの根拠によって正当化される確実に真なる知識ではないとしても、知識ではないと断定する必要はないことになるだろう。倫理的知識が、科学的知識と同様に推測的知識であっても構わないからである。

もしそうであるとすれば、倫理的知識が理性や経験（あるいは直覚）などの源泉によっては得られず、したがって、従来の科学観によれば、科学的知識としての資格がないという理由で、非認知主義のように、われわれは倫理的価値に関する知識をもってならず、価値は単なる情緒の表現にすぎないという結論に至る必要はないということになるだろう¹⁷⁾。

次に正当化主義についてさらに詳しくみていくことにしよう。

(2) 根拠、源泉に関する前提：正当化主義

伝統的な認識論によれば、確実に真なる知識は権威ある根拠によって正当化されたものでなければならなかった。しかし、何らかの根拠によって正当化しようとする試みがことごとく失敗することを明らかにしたのがポパーであった¹⁸⁾。それをミュンヒハウゼンのトリレンマの形で定式化したのが、ドイツにおけるポパー追従者、H. アルバート (H. Albert, 1921-) である¹⁹⁾。ミュンヒハウゼンのトリレンマとは、正当化しようとする試みは、無限後退 (infiniter Regre ㉑) か、循環 (Zirkel) か、中止 (Abbruch) のどれかに帰着するというものである。ポパーの知識論は、一切の正当化を必要とすることなく、知識の成長について語ることでできる非正当化主義である²⁰⁾。それは、推測と反駁、あるいは試行と錯誤から成るもので、いろいろな推測を意識的に、批判的テストないし批判的検討にかけようとする態度を奨励し、それがまさに「誤りから学ぶ」ことであると主張する²¹⁾。そして、人間のさまざまな営為の中で、この批判的態度が適用可能な分野をできる限り広げようとする試みの提唱を、「批判的合理主義」と名づけたのである²²⁾。

われわれの知識の中の何ものかを特権的な地位に押し上げ、それを批判の対象からはずすべきではなく、可能な限り批判に対して開いておくようにすべきであるという主張をすることによって、理性にせよ経験にせよ、それらが批判の埒外にあって、特権的な権威をもつということも拒否するのである²³⁾。逆にいうと、批判の対象として俎上に載せられるのであれば、知識はどんな源泉から得られたものでも構わないということにもなる。しかも、ポパーによれば、知識の主たる源泉は、近代認識論では確実に根拠をもつ源泉としては排除されていた、伝統(的知識)であるという²⁴⁾。もしそうであるとすれば、理性ないし経験か、あるいは直覚かといった自然主義と直覚主義との論争も不毛なものとなるであろう。

かくして、自然主義、直覚主義、非認知主義の間の三棘みの状態は、その三者に共通する前提である、K-Kテーゼとそれから派生する正当化主義から生じたものであることがわかる。

ここまでは、非正当化主義と、伝統が知識の源泉（といっても確実な根拠としての源泉ではないが）であるという主張を含むポパーの批判的合理主義の立場から、メタ倫理学の3つの立場を批判するというネガティブなものであったが、次節では、ポパーの批判的合理主義に基づく、ポジティブなメタ倫理学の立場を模索することにしよう。

IV. メタ倫理学としての批判的合理主義

(1) 批判的合理主義の適用範囲

ポパーの思想といえば、科学方法論としての反証主義が想起されるが、批判的合理主義の方が広い概念であり、私見によれば、反証主義は、批判的合理主義を科学に適用したもので、批判的合理主義の一形態である²⁹⁾。科学においてはテスト、特に経験的テストが批判の主要な武器になるが、テスト可能ではなく、したがってポパーの意味で反証不可能な、例えば、哲学上の理論についても、批判的検討、議論は可能であり、批判的合理主義を哲学に適用することは可能である³⁰⁾。哲学の主張が他の主張とはまったく切り離されてそれだけで主張されるならば、それについて議論することはできないが、そのことは科学的主張についても当てはまることである。科学理論であれ、哲学的理論であれ、それは問題解決の試みであり、問題状況との関係において批判的な議論や検討が可能である。倫理学上の理論もまた経験によってテスト可能ではないとしても、もしそれが何らかの問題を解決しようとする試みであるとみなすことができれば、倫理学上の理論について批判的議論が可能になるであろう。ある倫理的理論は解決しようとした問題を解決しているのかとか、その理論と競合する他の倫理的理論よりうまく問題を解決しているのかとか、単に問題をすり替えただけではないのかとか、等々と問うことができ、それらについて議論することができる。このような議論は倫理学上の理論について批判的、合理的に議論するものなので、メタ倫理学に属することになる。こうして、メタ倫理学としての批判的合理主義が可能であることがわかるのである。

(2) メタ倫理学としての批判的合理主義

批判的合理主義は、科学（自然科学、社会科学を含む）だけではなく、哲学や倫理学にも適用可能なものであるが、しかし、ポパーも指摘するように、科学理論と倫理学理論との間には、明確な相違も存在するように思われる。この点を検討しながら、メタ倫理学としての批判的合理主義の一つの可能性を考察することにしよう。

1) 批判的二元論の問題

1945年に出版された『開かれた社会とその敵』におけるポパーは、開かれた社会の特徴として、批判的二元論 (critical dualism) を挙げ、批判的二元論とは、次のようなものと列挙する³¹⁾。

(a) 自然の規則性を記述する自然法則とは異なり、規範ないし規範法則は、人間が作ったり、変更したりできるものであり、したがって人間はそれに対して道徳的責任がある。(b) 自然は事実や規則性からなっており、それ自体は道徳的でも非道徳的でもないのに対して、自然に対してわれわれの基準 (standard) を押しつけ、このようにして自然界に道徳を持ち込むのはわれわれであり、責任や決定はわれわれによってのみ自然界にもたらされる。(c) こうした決定は、事実に関わる (pertain) としても、けっして事実 (や事実についての言明) から導出することはできない。そして、この考えを、「事実と決定の二元論」とも呼ぶのである³²⁾。

この批判的二元論ないし事実と決定の二元論は、「事実－価値の隔絶 (fact-value gap)」テーゼを主張する非認識主義 (ないしは倫理的懐疑主義) と酷似しており、ウォルドロンは、ポパーのまさにこのような主張から、かれの立場を「洗練された情緒主義」と呼んだのであった³³⁾。E. ボイルもまた、ポパーの批判的二元論をエイヤーの主張と同一のものとして解釈しているが³⁴⁾、それに

反対してポパーは次のように述べている³⁰⁾。それは、4点に要約できよう。(a) 規範や基準がわれわれ自身の創造物であるとしても、あるものは良いものでありえたり、またあるものは悪いものでありえたりし、それらを改善していくことができるので、相対主義ではない。(b) 規範や基準は、人間の創造物であり人為的なものでありながら、物理的世界である世界1や人間精神の世界である世界2とは独立した世界3に属するものであり、自律的である。(c) 客観的真理や絶対的真理という観念は、人為的なものでありながら、誤りを犯しがちなわれわれの作る理論がそれに到達し損なっていると言えるという意味で、規制的観念 (regulative idea) であると同様、絶対的正義という観念も、われわれの行う道徳的判断や道徳的決定がそれに到達し損なっていると言えるという意味で、規制的観念である。(d) 絶対的真理の規準 (criterion) が存在しないと同様、絶対的正義の規準も存在しないが、そのことによって、真理が存在しなくなることがないと同様、正義が存在しなくなるといこともない³²⁾。

ポパーによれば、科学が真理の探求であるのとアナログカルに倫理学は正義、善の探求であり、われわれ人間は知的な誤りを犯すように道徳的な過ちも犯すが、そこから学ぶことが可能である。そして過誤から学び、倫理的規範を改善していくうえでも、試行錯誤、推測と反駁の方法が適用されることになる。この考えは、倫理的事実論の考えに近いように思われるが³³⁾、この問題の考察については、まだ私自身の考えが固まっていないので、別の機会に譲りたいと思う。ただし、規範、価値の真理性の問題について若干論じておくことにしたい。

2) 規範、価値の真理性の問題

注28)でポパーは、規範や規範法則については、比喩的にしか真、偽をいうことはできないと主張していると述べたが、1974年に出版された「自伝」の中では、それとは対照的に次のように述べている³⁴⁾。

提起されるあらゆる価値と共に次のような問いが生じる。すなわち、それが価値であるのは真であるのか、その価値が価値の階層の中で相応しい地位を占めているというのは真であるのか、親切が公正さより価値があるとか、あるいはそもそも親切が公正さに匹敵するとかというのは真であるのかなどという問いである。

すなわち、価値に真理値を付与することが可能なような主張をしているのである。これはどう考えたらよいのであろうか。私としては、後者の主張を支持したいと思う。『開かれた社会とその敵』における前者の主張は、世界3理論の提唱以前であることと、後期の著作である『よりよき世界を求めて』を視野に入れると、後者の主張の方がよりポパーの思想と適合するからである³⁵⁾。

また、タルスキーの真理の定式化によれば、まさに規範、価値についても真、偽を主張することは可能である。

「すべてのカラスは黒い」という科学的言明が真であるのは、すべてのカラスは黒いときかつそのときに限る、といえるのと同様に、「殺人は悪である」という規範的言明が真であるのは、殺人は悪であるときかつそのときに限るといえるのである。後者の主張に対する疑問は、この規範の真理性がどのように判定されるのかとか、その判定の規準は何かという問いに答えられなければ、真理値を与えることはできないと考えてしまうことから生じるように思われるが、それについては、科学理論においても真理の判定規準は存在しないとしても、それに真理値を付与することは無意味ではないといえるのと同様に、規範的言明に真理値を付与しようとすることも無意味ではないと答えることができるだろう³⁶⁾。しかし、先にもお断りしたように、この問題についてのさらなる考察は別の機会に譲りたいと思う。

しかしながら、以上の考察からしても、批判的合理主義が、科学方法論としてだけではなく、メタ倫理学においても有効性を発揮するということは少なくとも明らかになったように思われる。

注

- 1) 私の知る限り、ポパーの倫理思想に関する論文は若干あるが、それをテーマにした著書は出版されていない。
- 2) ウォルドロンは、ポパーのメタ倫理学理論が重要であることを指摘したうえで、しかし、「私の知る限り、戦後出版されたメタ倫理学理論に関する重要な著作において、ポパーの批判的二元論についてしっかりした議論がなされたことはない」と述べて、ポパーのメタ倫理学理論を考察している。J. Waldron, *Making Sense of Critical Dualism*, in *Popper and the Human Sciences*, G. Currie and A. Musgrave eds., Nijhoff, Dordrecht, 1985, p.117. しかし、私見によれば、かれはポパーの非正当化主義の意義を理解し損ねているので、ポパーの倫理学理論が直覚主義なのか、倫理的懐疑主義（われわれの用語では非認識主義）なのかと悩んだあげく、結局のところ、成熟し洗練された情緒主義（非認識主義の一種）として分類せざるを得なくなってしまっている。
- 3) 実はもう一つ理由がある。それは私事で恐縮であるが、二十数年前、私の学部時代にまで遡る。当時東京教育大学の教授であった堀田彰先生の倫理学の講義を受講した際、次節で述べることになるメタ倫理学の3つの類型を先生が紹介され、このうちのどれを支持するかと学生に尋ねられたことがあった。その時には返答に窮したのだが、今になってようやく一応の答えといえそうな見解に到達した。遅きに失した感はあるが、ここでそれを発表してみようという気持ちになったのである。
- 4) タルスキーの真理論については、「真理の意味論的観念と意味論の基礎」、坂本百大編、『現代哲学基本論文集Ⅱ』、勁草書房、1987年、51-120頁参照。
- 5) 真理にまつわる問題は難問とされてきたが、この問題は二つに分けられるかもしれない。「何が真理であるのか（What is true?）」という問いと、「真理とは何か（What is truth?）」という問いである。この二つの問いは類似しているので、混同されがちであるが、前者は、真理という概念を前提とした上で、何が真理として該当するのかという問いであり、後者は、真理という概念はそもそもどのようなものであるかという問いである。しかし従来、前者の問いに答えるためには、真理の判定規準（criterion）をもたねばならず、また後者の問題である真理の定義にも、真理の判定規準が含まれなければならないと考えられてきたので、両者を必ずしも区別する必要はないとみなされてきた。ピラトが「真理とは何か」と尋ねたことはあまりにも有名であるが、この問いは、どちらに属する問いなのであろうか。従来立場からすれば、どちらにも属する問いであるということになる。だとすれば、これに答えることは至難な業になるであろう。しかし、二つの問いを区別すべきであるという立場からすれば、かれの問いは曖昧であるといわざるをえなくなる。だが、タルスキーはまさに、後者の問題に答えようとしたのであり、しかも、かれの定義には判定規準は含まれていない。ピラトの問いが後者の問いであるとすれば、タルスキーはその問いに対して明確に答えていることになるが、他方、ピラトの問いが前者の問いであるとすれば、タルスキーはピラトの問いには答えていないことになる。定義を行うことと、判定規準を与えることを区別したことを評価する方が、メタ倫理学上の問題を考察するうえでパースペクティブが広がるように思われる。ポパーも定義と判定規準との区別の重要性を指摘している。K. R. Popper, *Objective Knowledge*, Clarendon Press, Oxford, 1972, pp. 319-29. (邦訳、『客観的知識』、森博訳、木鐸社、1974年、355-67頁)。詳しくは、IV節で論じるつもりである。
- 6) 普通は次のようには考えないが、このような解釈も可能である。すなわち、後者は歴史上の人物について語っているとみなし、前者は後者の文に登場するカタカナの言葉について語っているとみなす解釈である。この場合には、どちらも偽ということになるだろう。

- 7) 以下のような仮定は考えにくいことであるが、もしももとの発言に登場する「嘘をついている」という言葉が財布に関するものではなく、「私は嘘をついている」という文についてであると仮定しても、本文の結論と同様になるだろう。この仮定においても言語のレベルの混同が生じているからである。
- 8) 注9) 参照。
- 9) タルスキーの定義は、形式化された言語におけるものであり、その定義を正確に構成することは高度に専門的かつ技術的であるが、結論だけを要約すれば、単純明快である。かれの真理の定義は、‘p’ が真であるのは p であるときかつそのときに限る、というものである。例えば、「ソクラテスは哲学者である」が真であるのはソクラテスは哲学者であるときかつそのときに限る、ということになる（引用符がまさに用いられていることに注意されたい。また引用符が単語ではなく、文に用いられていることにも注意されたい）。この定義では、ソクラテスが哲学者であることはどうやって判定されるのかということについては、まったく言及されておらず、ソクラテスが哲学者であれば、「ソクラテスは哲学者である」という文は真だということになるというものである。注5) 参照。尚、ポパーの批判的合理主義と両立しうる倫理的事実論への、この真理論の応用については、第IV節で若干、言及することになるであろう。
- 10) とはいっても、メタ倫理学だけで倫理学が自己完結しているわけではないことも確かである。これは言うは易く、行うは難しなのであるが、地球環境問題、先端医療の問題などの現実的諸問題について具体的で明確で首尾一貫した実際の規範や価値を提唱することを目指す規範倫理学もまた倫理学の重要な課題である。しかし、その際にもメタ倫理学的分析や議論は有効である。
- 11) 堀田彰著、『倫理学』、10-12 頁（氏が私たちの講義で用いたこのテキストは出版されなかったようである。公刊されたかれの論文で、同一ではないが類似の議論がなされているものとしては、「倫理理論の根本問題」、堀田彰、片木清編、『現代倫理学』、法律文化社、1974 年がある。80 頁）。前者で、かれは、最初にシジウィック（H. Sidgwick, 1838-1900）に言及するという議論の流れから、先ず直覚主義を取り上げ、それを中心に類型化しているが、かれも指摘している通り（12 頁）、このようなメタ倫理学上の問題が明確になったのは、G. E. ムーア（G. E. Moore, 1873-1958）からであり、その際、批判の対象となったのが、伝統的に支配的であった自然主義であることから、ここでは自然主義を最初に取り上げることにした。その結果、記号や用語を若干変更したことをお断りしておきたい。
- 12) この立場が科学的知識をモデルにしており、しかも従来の科学観に基づいていることは明らかである。この典型的な例としてよく言及されるのは、J. S. ミル（J. S. Mill, 1803-76）の倫理学理論である。J. S. Mill, Utilitarianism, in *The English Philosophers from Bacon to Mill*, Edwin A. Burt ed., The Modern Library, New York, 1939, pp.895-948. 後に考察するように、科学的知識に対する見方が変われば、知識一般に対する見方も変わり、したがって、倫理的知識に対する見方も変わることがありうるのである。Ⅲ節（1）参照。
- 13) これが有名な G. E. ムーアによる自然主義批判であり、それを「自然主義的誤謬（naturalistic fallacy）」と名づけたのであった。G. E. Moore, *Principia Ethica*, Cambridge University Press, London, 1903, p.10.
- 14) この立場も科学的知識をモデルにしており、しかも従来の科学観に基づいていることは明らかである。この典型は、A. J. エイヤー、『言語・真理・論理』、吉田夏彦訳、岩波書店、1955 年である。特に 6 章参照。注17) も参照。
- 15) 「根拠」と「源泉」は異なる概念であるといわれるかもしれないが、伝統的には、源泉は、間違っていることもありうる単なる情報の入手先という意味ではなく、まさにそれが真であることを正当化する根拠として考えられていた。これについての詳細な分析は、K. R. Popper, *Conjectures and Refutations*, Routledge, London, 1963, pp.18-21, （邦訳、『推測と反駁』、藤本隆志他訳、法政大学出版局、1980 年、30-35 頁）を参照のこと。

- 16) *Objective Knowledge*, p.76, (邦訳, 88頁)。 *Conjectures and Refutations*, pp.114-5, (182-5頁) も参照のこと。推測的知識であるからといって, 真理と無関係であるというわけではない。むしろ, 真理が探求の目的であるからこそ, 真理以外の何ものでもない全真理に到達していないわれわれの理論は, 推測, 仮説に留まるのであり, そして, 批判を通じて真理を追求するということになるのである。
- 17) こうした主張の典型的な例は, 初期のエイヤーに見いだすことができる。かれは次のように述べている。「われわれは価値の陳述はもし有意味であるならば普通の科学的な陳述であること, もし科学的でないならば字義上の意味は持たず, 単なる情緒の表現であって, それは真でも偽でもありえない」と。A. J. エイヤー, 前掲書, 122頁。但し, かれは「正当化」という言葉を用いていない。かれの武器は有意味性の基準としての実証可能性の原理であるが, 実証 (verification) というのも正当化の一種であることは明白である。最も洗練されていると思われる非認識主義 (かれ自身は「倫理的懐疑主義」と呼んでいる) を主張している J. L. マッキー (J. L. Mackie, 1917-81) においては, 実証より弱く, しかも有意味性の基準ではないとしてもやはり正当化の一形態である「確証 (to validate)」が, 批判の武器として用いられている。J. L. Mackie, *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Penguin Books, 1977, p.27, (邦訳, 『倫理学: 道徳を創造する』, 加藤尚武監訳, 哲書房, 1990年, 26頁, 但し, 邦訳のこの箇所には誤訳がある)。
- 18) *Conjectures and Refutations*, pp.50-9, (邦訳, 85-101頁)。
- 19) H. Albert, *Traktat über kritische Vernunft*, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1968, pp.11-5.
- 20) これを精緻化した最近の業績として次の著作を挙げておきたい。D. Miller, *Critical Rationalism: A Restatement and Defence*, Open Court, Illinois, 1994.
- 21) *Conjectures and Refutations*, pp.vii-viii, (邦訳, xi-xii頁)。
- 22) K. R. Popper, *Autobiography of Karl Popper*, in *The Philosophy of Karl Popper*, P. A. Schilpp ed., Open Court, Illinois, 1974, p.92. (邦訳, 『果てしなき探求: 知的自伝』, 森博訳, 岩波書店, 1978年, 163頁)。
- 23) K. R. Popper, *The Open Society and Its Enemies*, Routledge, London, 1945, Vol. II, pp.378-80.
- 24) *Conjectures and Refutations*, pp.27-8, (邦訳, 49頁)。
- 25) 拙稿, 「批判的合理主義」再考, 『哲学思索と現実の世界』, 工藤喜作その他編, 創文社, 1994年, 427-62頁, 参照。
- 26) 哲学への具体的な適用については, ポパー自身がそれを行っている。 *Conjectures and Refutations*, pp.193-200, (邦訳, 322-37頁)。
- 27) *The Open Society and Its Enemies*, Vol. I, pp.57-66.
- 28) ポパーは, 規範法則について, それが良いとか悪いとか, 正しいとか間違っているとか, 受け容れられるとか受け容れられないとかいうことはできるかもしれないが, それが「真」であるとか「偽」であるとかいうのは比喩的な意味においてだけであるとまで主張している (*Ibid.*, p.58)。後で考察するように, この主張は後期のポパーの主張とは衝突するように思われる。
- 29) 事実—価値の隔絶テーゼとは, 価値の言明は事実の言明から導出不可能であるが, その理由は, 価値の言明はわれわれの態度の表明ないし世界に対する反応にはかならず, 事実と結びつけられるような価値は世界には実在しないからというものである。私見によれば, ポパーの批判的二元論と事実—価値の隔絶テーゼは, 価値が事実から導出不可能であるという主張では一致しているが, その理由が相違しているように思われる。後者では, 価値が世界に存在しないからであるが, 前者では, 価値を実在の世界に創造するのはわれわれであり, したがってその責任を負っているのは, 神でも, 自然でも事実でもなく, われわれ人間だからであるというものである。注 2) および 35) 参照。
- 30) Edward Boyle, *Karl Popper's Open Society: A Personal Appreciation*, in *The Philosophy of Karl Popper*, p.851.

- 31) K. R. Popper, Lord Boyle on the Dualism of Facts and Decisions in The Open Society, in *The Philosophy of Karl Popper*, pp.1155-99. 傍点は原文イタリック。
- 32) この点がまさに注5) で指摘したことであった。
- 33) ポパーの弟子アガシ (J. Agassi, 1927-) は、ウォルドロンに答える形で、ポパーが倫理的事実論者であると述べている。J. Agassi, *The Gentle Art of Philosophical Polemics*, Open Court, Illinois, 1988, p.274.
- 34) K. R. Popper, *Autobiography of Karl Popper*, in *The Philosophy of Karl Popper*, p.155. (邦訳, 278-9頁)。傍点は原文イタリック。
- 35) 紙面の都合上、これについての詳細な分析はここでは割愛させていただくが、『よりよき世界を求めて』の中で、「實在の形成」という興味深いアイデアをポパーは提出しており、そこでは物理的世界である世界1が閉じた体系ではなく、世界2、世界3に対して開かれており、それらとの相互作用によって、實在的世界が形成されていくことが強調されている。このアイデアは、私見によれば、實在的世界が単なる物理的自然の世界ではなく、倫理的事実の世界でもありうる可能性を開くものである。Karl Popper, *In Search of A Better World*, Routledge, London, 1992, pp.26-9. (邦訳、『よりよき世界を求めて』, 小河原誠, 蔭山泰之訳, 未来社, 1995年, 54-9頁)。
- 36) しかも、科学理論の反証可能性のテーゼを、倫理的規範についても適用することすら可能であるかもしれない。「すべてのカラスは黒い」がもし一羽の黒くないカラスが存在するならば、それによって反証可能であると同様に、「殺人は悪である」は、もし悪ではない殺人が存在するならば、それによって反証可能であると考えることができるかもしれないからである。但し、「殺人は悪である」が、現実には殺人事件が起きているという経験的事実によって反証されるわけではないことに注意すべきである。また、殺人を犯すかどうかということが、われわれ人間の一人一人の決定およびそれに基づく実際の行為にかかっているということもまた銘記すべきである。ポパーはこうした事態を指して、批判的の二元論とか、事実と価値の二元論と呼んだのだと思われる。